

『楚辭』三大注の注解姿勢の比較 —王逸「離騷テーマ」を中心に—

A Comparative Study of
Three Major Classic Annotations of “*Chuci*”:
Centering on Wang Yu’s “*Lisao*” Theme

田 宮 昌 子

筆者は、幕末の日本漢学に関する研究プロジェクトの一環として、亀井昭陽『楚辭訣』の読解に取り組む機会が有り、その際、楚辭についての中国における先行注として、古典期を代表する『楚辭』三大注である王逸『楚辭章句』、洪興祖『楚辭補注』、朱熹『楚辭集注』と、『楚辭訣』と密接な関係を持つことが明らかとなった近世の比較的新しい注である、林雲銘『楚辭燈』との比較参照を行った。それは『楚辭訣』の注解姿勢の特徴をみるためであったが、この作業を通じて、三大注それぞれに相違点がある一方で、より新しい明清期の注に対しては、三大注に共通する特徴も指摘できるように思われ、この点に関心を持った。本稿では楚辭および屈原理解の原点であり続ける『楚辭章句』の注解姿勢との共鳴や距離という観点を軸に三大注の特徴を考察する。

キーワード：王逸『楚辭章句』、洪興祖『楚辭補注』、朱熹『楚辭集注』、注解姿勢、「離騷テーマ」

目 次

はじめに

一、王逸「離騷テーマ」：「離騷」および屈原理解の古典的基礎

二、「離騷」注解の比較を通してみる『楚辭』三大注の注解姿勢

- 1、『章句』を『補注』『集注』が継承、踏襲する例
- 2、『章句』を『補注』は踏襲しているが、『集注』で変化が生じている例
- 3、『章句』を『補注』が踏襲せず、『補注』を『集注』が継承する例

むすびに

はじめに

筆者は、幕末の日本漢学に関する研究プロジェクトの一環として、亀井昭陽『楚辭訣』（以後『訣』）の読解に取り組む機会が有り、その際、楚辞についての中国における先行注として、古典期を代表する『楚辭』三大注である（後漢）王逸『楚辭章句』、（宋）洪興祖『楚辭補注』、（南宋）朱熹『楚辭集注』（以後、総称して「三大注」、それぞれを『章句』『補注』『集注』）および『訣』と密接な関係を持つことが明らかとなった（清）林雲銘『楚辭燈』（以後、『燈』）との比較参照を行った。それは『訣』の注解姿勢の特徴をみるためであったが、この作業を通じて、三大注それぞれに相違点がある一方で、より新しい明清期の注に対しては、三大注に共通する特徴も指摘できるように思われ、この点に関心を持った。『楚辭』注釈の古典中の古典である三大注については、既に研究し尽くされているようにも思われるが、本稿では楚辞および屈原理解の原点であり続ける『章句』の注解姿勢との共鳴や距離という観点を軸に三大注の特徴を考察する。

一、王逸「離騷テーマ」：「離騷」および屈原理解の古典的基礎

「離騷」は楚辞の作品群の中でも際立って特別な作品である。『章句』『離騷』篇「後序」によれば、前漢の劉安、後漢の賈逵および班固がそれぞれに『離騷經章句』を撰したが¹、彼らが注をつけたのは屈賦二五篇のうち「離騷」篇のみであった。洪興祖『楚辭補注』の目録から、王逸『楚辭章句』には「離騷」篇を「離騷經」とし、続く諸篇の篇名には「傳」字を付す版があったことが知られている²。そこから、『章句』は「離騷」を「經」とし、他篇をその「離騷」の経義を説く「伝」とする経学的意図のもとに編纂されたものとみる説もある³。

「離騷」の作者とされ、戦国末期に入水自殺によって生を終えたとされる屈原は中国史を貫いて今日まで中国の主流文化の中で伝承されて来た人物であるが、後世の屈原への言及は屈原を「離騷」の作者というより「離騷」の主人公として捉えており、屈原像の核心には「離騷」がある。「離騷」無くして屈原の伝承が今日まで行なわれることは無かったであろうし、屈原の悲劇的伝承が「離騷」の読み方を強く規定してもいる。このように、屈原作として伝わった辞賦の中でも「離騷」は別格の一篇である⁴。

また、王逸『楚辭章句』は、戦国末から後漢に至る最初期の楚辞及び屈原理解の集大成であり、先行する注釈書が亡んだため、後世に伝わったものとしては最古の楚辞注釈書である。また、楚辞学の基礎が形成された漢代の楚辞注釈本としても唯一の伝本である。このため楚辞学において後世の如何なる研究も取って替わることの出来ない特別な位置を占め続けて来た。また、屈原像の形成においても、司馬遷『史記』『屈原傳』と共に屈原に関する最古の情報源として、屈原像の祖型を後世に提示する作用を果たし続けて来た⁵。

そこで、筆者は王逸『楚辭章句』における注解の基調を明らかにするために、「離騷」篇二序⁶および「離騷」注文を読み、正反相對立する価値と両者の葛藤、双方の価値を象徴する語彙および特徴的文型（被害を表す受身形など）等を析出し、「離騷」注解にみられる主旋律や通奏低音を分析し、それらを包括して「離騷テーマ」と名付け、その『章句』収録作注解における展開を考察した⁷。以下、『章句』「離騷テーマ」を軸に三大注の特徴を比較する前に、「離騷テーマ」について概説する。

1、メインテーマ：「登用」 関連語彙：「用」「舉」「任」「進」「事」

「離騷」篇「前序」は、屈原が「離騷」を制作した動機を「君の覺悟して正道に反り、已を還すを冀ふ也」とする。「離騷」は、君が非を悟り、自分を召し戻すことを願うものだというのである。「離騷」注文においても忠臣の君への訴えとして「離騷」を読む姿勢が顕著である。その中では、人君が賢臣忠臣を登用すること、その結果として賢人が「位」を得ることが関心の中心となっており、「登用」が「離騷テーマ」のメインテーマとして浮上する。「登用」テーマの中には更に以下五つのサブテーマを指摘することが出来る。

1) 「よき登用」「あしき登用」

「昔三后之純粹兮 固衆芳之所在」…夏禹、殷湯、周之文王の能く……聖明の稱有る所以は皆な衆賢を舉用して顯職に居らしむるの故に道化興りて萬國寧する也。

「何桀紂之猖披兮 夫唯捷徑以窘步」…桀紂は愚惑にして天道に違背し、施行惶遽なり。……故に身は陷阱に觸れ滅亡に至る。法を以て君を戒むる也。

「離騷」注文では、堯舜となるか桀紂となるか、人君の位にある者の成敗を決するものとして、「賢を擧げ能を任ず」を繰り返して説く。賢人の補佐を得れば世が治まる、世が治まれば明君たれるのであって、古の聖王が聖王たる所以も「賢人を登用したから」であると説く。こうして、人君の徳の具現として「よき登用」が説かれ、「よき登用」を勧め「あしき登用」を諫める。

2) 臣としての賢人 関連語彙：「君」「臣」

「衆女嫉余之蛾眉兮 謠諑謂余以善淫」衆女は衆臣を謂ふ也。女は陰也。專擅無きの義なり。猶ほ君の動きて臣の隨ふがごとき也。故に以て臣に喩ふる也。

正文中に詠まれる様々な事象を注文は君臣関係に解する。そこに注者の「登用」への強い関心と君臣関係の規定のありようを見ることが出来る。注文における君臣関係への言及では、君は能動、臣は受動である。ここから自ずと陰陽への対応も定まる。「九章」涉江「陰陽易位時不當兮」の注は「陰は臣也、陽は君也」である。万物の根源である陰陽への対応が定めれば、男女を始め、注者が主従関係を見出す全ての事象に君臣関係を当てることが可能となる⁸。このように、君臣という上下関係

における臣「下」としての立場が、注文のメインテーマを「登用」とする基盤となっている。

3) 在位 関連語彙：「位」

「羌内恕己以量人兮 各興心而嫉妒」…在位の臣、心は皆な貪婪にして、内に其志を以て他人を恕度す。己と同じからざれば、則ち各嫉妬の心を生じ、清潔を推棄して、用ひらるるを得ざらしむ。

注文は臣下として登用されている状態を「在位」と表現する。「離騷」正文には「位」の出例はなく、注者の「登用」の関心がどこにあるかを示すものといえる。

4) 敗者としての賢人

「芳與澤其雜糅兮 唯昭質其猶未虧」…我外には芬芳の徳有り、内には玉澤の質有るも…施用せらるるを得ず…用ひられざれば則ち獨り其の身を善くする也。

「離騷テーマ」に於いて現実に登用されているのは讒佞の側である。屈原、或いはそれに同化して「離騷」を読む「己れ」は敗者の側にあり、そうであることが「忠賢」の証左のようにになっている。このため、登用の語彙は圧倒的に否定形で現れ、更に「不見…」（…されず）など受身表現を取ることが多い。この受動性にも賢人の臣下としての側面をみることが出来る。

5) 去一國を去る、君を去る 関連語彙：「去」

「懷朕情而不發兮 余焉能忍與此終古」…我忠信の情を懐くも、發用せらるるを得ず。安んぞ能く久しく此の闇亂の君と終古にして居らんや。意おもふに復た去らんと欲する也。

賢人がその理想を世に行うためには、己れを認め用いてくれる君を得なければならない。君が賢君でなく、國に道が行われない時、賢人はその國を去って、天下に賢君を求めるべきである。それが古の賢人のとるべき「出処進退」の道であった。

2、派生テーマ：「登用」をめぐる葛藤

メインテーマからは、また幾つかの派生テーマが生じている。主なものに以下5テーマがある。

1) 忠佞の対立 関連語彙：「忠」「賢」「佞」「讒」

「登用」をめぐるのは、君の信任とそれによって得られる「位」をめぐる臣臣間に対立・葛藤が発生する。注者は「離騷」本文中の植物や鳥獸などの描写をこれらの対立や葛藤の象徴として読み解いていく。

「謇吾法夫前修兮 非世俗之所服」…我忠信謇謇たるは乃ち上は前世の遠賢もとに法る。固より今時の俗人の服行する所に非ざる也……己の服飾法り難しと爲すと雖も我前賢に倣ひ以て自ら潔を修む。本より今世の俗人の服佩する所に非ず。

「離騷」注文において「忠」が形成する熟語は、出例数の多い順に「忠信」「忠直」「忠正」「忠貞」「忠

誠」である。一方、「賢」は「賢」一字の用例が最も多く、「求賢」「害賢」など、「賢」が目的語になっている例が殆どを占める。この場合の「賢」は「賢人」「賢士」「賢臣」など、『章句』注文中に登場する「賢」なる人々を指す語彙に相当すると見てよいだろう。

「吾令帝閭闔兮 倚閭闔而望予」…己れ賢を求めて得ず。讒を疾み佞を惡む。

「離騷」注文中において、「佞」と「讒」は、結合して「讒佞」の形で用いられる例が「佞」「讒」双方において最も多く、「讒佞」は「忠賢」に対立する人間類型となっている⁹。

2) 忠賢の受難

「惟此黨人之不諒兮 恐嫉妒而折之」…楚國の人、忠信の行ひを尚ばず。共に我が正直を嫉妬し、必ずや 挫折して、之を敗毀せんと欲す。

「離騷テーマ」において、「忠賢」であることは「忠賢」の受難の原因そのものであり、その受難は避けがたい運命となる。

3) 不遇 関連語彙：「遇」「遭」「世」「時」

「奏九歌而舞韶兮 聊假日以愉樂」…己れ徳は高く智は明し、宜しく舜禹を輔けて以て太平を致し、九徳の歌九韶の舞を奏すべし、而れども其の時に遇はず。

「不遇」一ふさわしい時、賢君の治世に「めぐり遇えない」ことへの嘆き—が「離騷テーマ」の通奏低音として流れている。「離騷」注文中においては、往々にして理想は否定形で、現実には逆に肯定形で語られる。理想と現実とは「世」と「君」の二つの面から捉えられ、現実には「暗」「亂」「濁」などの語で、理想の方は「明」「聖」などに加え、「堯」「舜」など具体的な「聖主」の名で表現される。

4) 孤高 関連語彙：「衆」「獨」

「資葦施以盈室兮 判獨離而不服」…衆人皆な資・葦・臬耳を佩び、讒佞の行ひを爲し、朝廷に満ちて、富貴を獲。汝は獨り蘭蕙を服し、忠直を守りて、判然として離別し、衆と同じからず。故に斥棄せらるる也。

「離騷」注文中では、「不與衆同」（衆と同じからず）、「不與衆合」（衆と合はず）などの表現が繰り返されて、「衆」という存在がクローズアップされる。「衆」「獨」双方の属性を見れば「忠佞の対立」そのものであるが、「衆」「獨」は正邪の対立にある多寡の側面を表現している。「獨（ひとり）」ただしいために、孤立をかこち、排斥を招く。その状況を支える矜持が「孤高」のテーマを形成する。

5) 清潔 関連語彙：「清」「潔」

「苟余情其信姱以練要兮 長願頷亦何傷」…己れ清潔を飲食して、誠に我が形貌をして、信にして美好、中心をして、簡練にして道要に合はしめんと欲す…何者、衆人苟も財利に飽かんと欲し、己れ獨り仁義に飽かんと欲する也。

「離騷」篇「後序」には、注者が抱く屈原イメージが具体的に述べられている。「忠貞の質を膺き、清潔の性を體し、直きこと砥矢の若く、言は丹青の若し。進みて其の謀を隱さず、退きて其の命を顧みず。此れ誠に絶世の行ひ、俊彦の英なり」。この評価には、屈原の人格であると信じられた価値への強い共感と賛美が現れている。「離騷」注文に見られる「清潔」のテーマはこのような屈原像から生じたものと思われる。

「離騷」注文では、正文に現れる香草や玉石などを食したり身に帯びる表現を、身を「清潔」にするものと解し、徳や節操といった内在の「清潔」を象徴させている。「清」「潔」の用例を見ていくと、「清潔」は「孤高」テーマの「獨」の側、つまり「忠賢」の属性であることが分かる。「清潔」はここまで見て来た「対立」「受難」「不遇」「孤高」を背景に、「敗者」である「忠賢」に矜持を与えるものとなっており、通奏低音のように全体の基調を形成している。

二、「離騷」注解の比較を通してみる『楚辭』三大注の注解姿勢

1、『章句』を『補注』『集注』が継承、踏襲する例

三大注の継承関係の有無を見るに当たっては、時代的に最も遅い『集注』から遡って見ることとする。以下に挙げる例では、『章句』の内容を受け継いでいる部分を下線で、『補注』の内容を踏襲している部分は太字で(『章句』『補注』注文中の対応する部分も同様に下線と太字で示す)、『章句』『補注』いずれにも見られない部分を網掛けで示す¹⁰。

84. 皇天無私阿兮 『章句』：竊愛爲私、所私爲阿¹¹。

覽民徳焉錯輔 『章句』：錯、置也。輔、佐也。

『章句』：言皇天神明、無所私阿。觀萬民之中有道德者、因置以爲君。使賢能輔佐、以成其志。

故桀爲無道、傳與湯、紂爲淫虐、傳與文王。

『補注』：徳、一作惠。文選、民作人¹²。補曰、焉、語助。錯、七故切。上天佑之、爲生賢佐、故曰錯輔。

85. 夫維聖哲以茂行兮

『章句』：哲、智也。茂、盛也。

『補注』：補曰、行、下孟切。

苟得用此下土

『章句』：苟、誠也。下土謂天下也。言天下之所立者、獨有聖明之智、盛徳之行。故得用事天下、而爲萬民之主。

『補注』：補曰、睿作聖、明作哲。聖哲之人、以有甚盛之行、故能使下土爲我用。『詩』曰、奄有下土。

84. 85的『集注』注:

錯、七故反。之、一作以。行、下孟反。○竊愛爲私、所私爲阿。錯、置也。輔、佐也。猶言惟德是輔也。言皇天神明、無所私阿。觀民之德有聖賢者、則置其輔助之力、而立以爲君也。哲、智也。茂、盛也。苟、誠也。下土謂天下也。言聖哲之人、有甚盛之行、故能有此下土而用之也。以上の例から以下3点を指摘できる。

- ①『集注』の殆どの部分は、『章句』注を土台に『補注』が『章句』を補う部分を取り入れ、若干のリライトを加えて成り立っている¹³。これが三大注の関係の基調と言える。
- ②『章句』『補注』で『集注』に含まれない部分は、『章句』の「使賢能輔佐、以成其志」、『補注』の「上天佑之、爲生賢佐、故曰錯輔」のように、多くは他の部分と意味的に重複する部分である。
- ③ごく一部に重複部分の省略でもなく、踏襲もされていない部分が存在する。『章句』の「故桀爲無道、傳與湯、紂爲淫虐、傳與文王」である。この部分はまさに『章句』が「離騷テーマ」を展開する部分で、後世往々にして「牽強付会」と見なされてきた部分である。『補注』も『集注』もこの部分を拾っていない。

以上が三大注に見られる3種の関係である。③については、以下に述べる。

2、『章句』を『補注』は踏襲しているが、『集注』で変化が生じている例

以下に挙げる例では、音注、字義、考異部分を省略し（「…」で示す）、文意についての部分のみを挙げる。下線は注目したい部分である。

112. 吾令豊隆乘雲兮

『章句』: …

『補注』: …

求宓妃之所在

『章句』: 宓妃、神女、以喻隱士。言我令雲師豊隆、乘雲周行、求隱士清潔若宓妃者、欲與并心力也。

『補注』: … 五臣云、處妃以喻賢臣。補曰…『洛神賦』注云、宓妃、伏犧氏女。溺洛水而死、遂爲河神。

113. 解佩纒以結言兮

『章句』: …

『補注』: …

吾令蹇脩以爲理

『章句』: … 言已既見宓妃、則解我佩帶之玉、以結言語、使古賢蹇脩而爲媒理也。伏羲時敦朴、故使其臣也。

『補注』: 五臣云、令蹇脩爲媒、以通辭理。補曰、宓妃、伏犧氏之女、故使其臣以爲理也。

112. 113的『集注』注:

…。虞妃、伏羲氏女。溺洛水而死、遂爲河神。纓、佩帶也。蹇脩、人名、理爲媒以通詞理也。蓋雷迅疾而威震、求無不獲。故欲使之求神女之所在、而令蹇脩致佩纓以爲理、則蹇脩似是下女之能爲媒者、然亦未有考也。

下線部分から見て取れるように、『章句』は正文中の「宓妃」を「隠士」と注し、「登用」「清潔」テーマを展開している。『補注』も五臣注を引きながら「宓妃」を「賢臣」と解しており、五臣注および『補注』には「登用」テーマの痕跡が見える。一方、『集注』は「宓妃」を直接「伏羲氏女」と注し、『補注』から神話要素は採用するものの、『章句』のみならず、五臣注、『補注』にも流れている「登用」テーマは素通りしている。

3、『章句』を『補注』が踏襲せず、『補注』を『集注』が継承する例

前項で挙げた少数の例外を除いては、『集注』は概ね『章句』に拠っている。『集注』が『章句』を継承しない部分は概ね『補注』で変化が生じており、『集注』がそれを継承している形である。

以下に挙げる例では、第129句「懷朕情而不發兮 余焉能忍與此終古」についての『章句』注に注目し、『補注』『集注』と比較する。下線は注目する部分、太字はキーワードである。

128. 閨中既以邃遠兮

『章句』: …。

『補注』: …。

哲王又不寤

『章句』: …言君處宮殿之中、其閨深遠、忠言難通、指語不達。自明智之王、尚不能覺悟善惡之情。高宗殺孝己、是也。何況不智之君、而多闇蔽、固其宜也。

『補注』: 補曰…閨中既以邃遠者、言不通羣下之情。哲王又不寤者、言不知忠臣之分。懷王不明而曰哲王者、以明望之也。太史公所謂、冀幸君之一悟、俗之一改也。

129. 懷朕情而不發兮 余焉能忍與此終古

『章句』: 言我懷忠信之情、不得發用。安能久與此闇亂之君、終古而居乎。意欲復去也。

『補注』: …補曰、此言當世之人、蔽美稱惡、不能與之久居也。

128. 129的『集注』注:

…言此以比上無明王、下無賢伯、使我懷忠信之情、不得發用、安能久與此闇亂嫉妬之俗、終古而居乎。意欲復去也。

ポイントとなるのは、第129句上句の「發」と下句の「此」の解し方である。『章句』は「發」を「發用」、「此」を「闇亂之君」と解し、「我懷忠信之情、不得發用。安能久與此闇亂之君、終古而居乎。意欲復去也」(我忠信の情を懐くも、發用せらるるを得ず。安んぞ能く久しく此の闇亂の君と終古にして居らんや。意おもふに復た去らんと欲する也)と通釈する。「忠」「用」「闇」「君」「去」など一連の関連語彙を動員して、典型的な「登用」テーマを展開している。

これに対し、『補注』は「發」には言及せず、「此」を「當世之人」(衆に相当)と解し、「此

言當世之人、蔽美稱惡、不能與之久居也」(此れ當世の人、美を蔽ひ惡を稱す、よく之と久しく居る能はざるを言ふ也)と通釈して、「登用」テーマを世俗に対する批判に転換してしまっている。しかし、『補注』は先行する第128句「閨中既以遠遼兮 哲王又不寤」では、「閨中既以遠遼者、言不通羣下之情。哲王又不寤者、言不知忠臣之分。懷王不明而曰哲王者、以明望之也」(閨中既に以て遠遼なりとは、羣下の情に通ぜざるを言ふ。哲王又た寤めずとは、忠臣の分を知らざるを言ふ。懷王明ならずして、哲王と曰ふは明を以て之に望む也)と『章句』「登用」テーマを継承し、続いて、『史記』「屈原傳」中の司馬遷が屈原の「離騷」執筆動機を述べる「冀幸君之一悟、俗之一改也」(君の一悟して、俗の一改するを冀幸ふ也)の一段を引用し、「登用」テーマを補い、強化させている。それが、続く第129句では『章句』注の「君」が消えて、正文に登場しない「衆」を唐突に登場させるのはかなり「牽強」と言える。

第128、129句に対する『集注』は、『章句』を踏襲し、第129句上句中の「發」を「發用」と解し、その通釈は『章句』をほぼなぞっているが、下句の「此」の解釈では『章句』を踏襲せず、結果として決定的な違いが生じている。

『章句』：我懷忠信之情、不得發用。安能久與此閨亂之君、終古而居乎。

『集注』：我懷忠信之情、不得發用。安能久與此閨亂嫉妬之俗、終古而居乎。

下線で示すように、『集注』は『章句』の字句をほぼなぞりながら、「之君」を「嫉妬之俗」に差替えている。この点では『補注』が「君」を「衆」に差替え、君上への批判を回避するのを踏襲した形である。

136. 民好惡其不同兮

『補注』：…。

惟此黨人其獨異

『章句』：黨、鄉黨、謂楚國也。言天下萬民之所好惡、其性不同、此楚國尤獨異也。

『補注』：…補曰…黨、朋黨、謂椒蘭之徒也。

137. 戶服艾以盈要兮

『章句』：艾、白蒿也。盈、滿也。或言、艾、非芳草也。一名冰臺。

『補注』：補曰、要與腰同。『爾雅』艾、冰臺。注云、今艾蒿。

謂幽蘭其不可佩

『章句』：言楚國戶服白蒿、滿其要帶、以為芬芳、反謂幽蘭臭惡、為不可佩也。以言君親愛讒佞、憎遠忠直、而不肯近也。

『補注』：…五臣云、言楚國皆好讒佞、謂忠正不可行於身也。

136. 137的『集注』注：

…○黨、朋也。言人性固有不同、而黨人為尤甚也。艾、白蒿、非芳草也。服之滿腰、而反謂蘭為臭惡、而不可佩。言其親愛讒佞、而憎遠忠直也。

ここでは「離騷」第136句の下句の「黨」の解釈において、三大注に違いが生じている。『章句』は「黨」を「楚國」に解し、第137句の通釈中に正文に無い「君」を挿入して、世俗と賢人の対立、讒佞と忠賢の対立、忠賢の不遇という「離騷テーマ」を展開している。一方、『補注』は五臣注を引いて「楚國」の語は踏襲しつつ、『章句』中の「君」の語は拾わず、楚国の俗を難じる意味に取っている。

『集注』は、『章句』や五臣注が「黨」を「楚國」と解してきた先例は踏襲せず、「黨」を「朋」と字義に則して解し、『補注』同様「離騷テーマ」関連語彙を用いながらも「離騷テーマ」から離れた一般論に解している。象徴的なのが下記の下りである。

『章句』：言君親愛讒佞、憎遠忠直、而不肯近也。

『集注』：言其親愛讒佞、而憎遠忠直也。

『集注』は『章句』の字句をほぼ踏襲しながら、「君」を「其」に差替えている。その意図するところは明らかである。

156. 何昔日之芳草兮

『補注』：…。

今直爲此蕭艾也

『章句』：言往昔芬芳之草、今皆直爲蕭艾而已。以言往日明智之士、今皆佯愚、狂惑不顧。

『補注』：…。

157. 豈其有他故兮 莫好脩之害也

『章句』：言士民所以變曲爲直者、以上不好用忠正之人、害其善志之故。

『補注』：…。五臣云、明智之士佯愚者、爲君不好修潔之士、而自損害。補曰、時人莫有好自修潔者、故其害至於荃蕙爲茅、芳草爲艾也。

156. 157的『集注』注：

…。世亂俗薄、士無常守、乃小人害之、而以爲莫如好脩之害者、何哉。蓋由君子好脩而小人嫉之、使不容於當世、故中材以下、莫不變化而從俗、則是其所以致此者、反無有如好脩之爲害也。東漢之亡、議者以爲黨錮諸賢之罪、蓋反其詞、以深悲之。正屈原之意也。

ここでも『章句』は「離騷テーマ」を展開する。正文がかつての「芳草」が今ではみな「蕭艾」になってしまったと嘆くのを、かつては「明智」であった臣下たちが今ではことごとく「愚」を装うと、臣下の節操の問題を言うものとして説き、続く「豈其有他故兮 莫好脩之害也」を「上不好用忠正之人、害其善志」（上、忠正の人を用ふるを好まず、其の善志を害す）と「上」が「忠正」の臣下を登用しないことが原因であるとして、君上を咎める意で解している。

第157句の上句「豈其有他故兮」の注を比較すると、『章句』の「上不好用忠正之人」に対し、『補注』は「時人莫有好自修潔者」と「上」を「時人」に入れ替え、世俗一般の問題に転換し、『集注』は更に進んで「君子好脩而小人嫉之」と、臣下の中での「君子」対「小人」の問題に解している。

以上三例に見られるように、漢代までの楚辭および屈原理解の集大成である『章句』を継承し、発展させる過程で、『章句』「離騷テーマ」に対し、『補注』から『集注』へとより距離が生じている。その要因としては、まず『補注』から『集注』へと、正文を字義と文脈に沿って読解しようとする方向に移行しているという文学史、注解史上の推移の上にあるということがある。同時に、上記三例の『章句』注文中の「君」字に対する反応に象徴されるように、宋代に成立した二注には君上批判を忌避、回避する傾向が明らかに見られる。

むすびに

以上、本稿では『章句』「離騷テーマ」の継承と距離という観点を軸に、『楚辭』三大注の注解姿勢を見てきた。以上をまとめると、以下二点を指摘できる。まず、『章句』は先秦から漢代に至る楚辭に関する知識と理解を集大成し、今日に至る古典的基盤となった。『補注』は『章句』の基盤を補充し、『集注』は二注の成果を受け継ぎ、総括した上で、一定の止揚を行っている。これが三大注の関係の基調である。次に、『章句』を強く特徴づける「離騷テーマ」については、『補注』まで継承されたものが『集注』で距離が生じる、或は『補注』で継承されず、『集注』にそれが引き継がれる、というように、後に行くほど距離が生じている。

『章句』を特徴づける「離騷テーマ」は、一章で見たように、「離騷」の創作動機を「君の覺悟して正道に反り、已を還すを冀ふ也」と考え、「離騷」を「忠臣の君への訴え」として読むところから生じている。『補注』から『集注』へと生じる「離騷テーマ」からの距離の要因には、二章で見たように、「離騷」あるいは作品が説くところを字義や文脈に則して読みとろうとする姿勢と、君主に対する非難を回避しようとする姿勢の2点が指摘できる。この2点はどちらも、後漢に成立した『章句』に対し、宋代という『補注』と『集注』が成立した時代の学術思想および政治思想と密接に関係しているであろう。

同様に、清朝期に成立した『燈』に対した場合には、三大注が総体として共通点を呈することからは、時代が下るにつれて、民間経済が発達し、『章句』「離騷テーマ」の核心を為す関心となっている「登用」からの自由度が相対的に増すことが「離騷」の読解に本質的な変容をもたらすことを示唆しているのではないかと思われる。明清期の「離騷」読解の特徴については稿を改めて論じたい。

附記1：本研究はJSPS科研費（課題番号17K02635）の助成を受けたものである。

附記2：本稿は2019年中国汨羅屈原及楚辭学國際學術會議において行った口頭発表「圍繞《章句》離騷主題的發展和演變問題來對比楚辭《章句》《補注》《集注》的注釋態度」を基に改訂を加えたものである。

参考文献：

- ①拙著「屈原像の中国文化史上の役割：漢代における祖型の登場」『宮崎公立大学人文学部紀要 2000』第8巻、第1号、2001年。
- ②拙著「悲憤慷慨の系譜—王逸注「離騷」にみる漢代屈原像」愛知大学現代中国学会『中国21』第15号、2003年。
- ③拙著「テキストとしての王逸『楚辭章句』—その問題点—」『宮崎公立大学人文学部紀要 2005』第13巻、第1号、2006年。
- ④「王逸『楚辭章句』注文にみる屈原像の祖型—電子文献を活用した系譜研究の試み—」大野圭介主編『「楚辭」と楚文化の総合的研究』汲古書院、2014年。

¹ 班固の『離騷經章句』序は、劉安のものを「經」の字をつけずに『離騷傳』としている。

² 洪興祖『楚辭補注』目録に「一本九歌至九思下皆有傳字」とある。

³ 例えば、浅野通有「『楚辭章句』における九辯の編次」『國學院雜誌』第71巻、第7号、1970年。宮野直也「王逸『楚辭章句』の注釈態度について」『日本中國學會報』第39集、1987年など。

⁴ 詳細は参考文献②参照。

⁵ 詳細は参考文献①と③参照。

⁶ 現行本『楚辭章句』第一「離騷」篇の前後にそれぞれ付されている序を指す。王逸に至るまでの楚辞学の流れ、屈原の伝とその人物評価、屈原賦二十五篇の創作背景、「離騷」篇についての理解と評価などが述べられ、「離騷」篇のみならず、『章句』全体についての王逸の注解姿勢を理解するための重要な資料となる。

⁷ 「離騷」篇二序および「離騷」篇注の読解作業、関連語彙の分析、「離騷テーマ」の析出、『章句』における「離騷テーマ」の展開などについて、詳細は参考文献②および④参照。

⁸ 例えば、「九章」涉江「雲霏霏而承宇」注「日以喻君、山以喻臣」、「九章」思美人「車既覆而馬顛兮」注「車以喻君、馬以喻臣」など。

⁹ しかし、「九歌」山鬼「雷填填兮雨冥冥猿啾啾兮 猿夜鳴風颯颯兮木蕭蕭」注文では、「雷は諸侯爲り、以て君に興す。雲雨は冥昧たり、以て佞臣に興す。猿猴善く鳴く、以て讒人に興す。…雷填填たるは君妄(みだ)りに怒る也。雨冥冥たるは羣佞聚まる也。猿啾啾たるは讒夫口を弄する也」と「佞」「讒」は別々に説かれている。この例が示すように、「佞」が正邪の邪の側をより広く指すのに対し、「讒」は讒言を行うことが核心にある。「人」や「臣」は「佞」「讒」双方と結びついて熟語を形成するが、「言」と結びつくのは「讒」のみである。

¹⁰ ここで言う「踏襲」には、一字一句同じのものだけでなく、字句に若干の異同は有るが文意は変わらないものも含む。具体例は注13を参照。

¹¹ 四部備要本には「所私爲阿」に続いて「一云所祐爲阿」とあるが、黄靈庚疏證『楚辭章句疏證』（中華書局、2007年）では、「黄本、夫容館本、湖北本、朱本、馮本、俞本、莊本、四庫章句本無「一云所祐爲阿」六字。案：有「一云所祐爲阿」者，後所增益」とする。本稿はこれに従う。

¹² 「徳一作恵。文選、民作人」部分は『章句』『補注』いずれの一部であるか明確ではないが、本稿では『補注』の考異部分と見做す。前掲注11黄靈庚疏證本も同様に扱っている。

¹³ 例えば、「離騷」正文「苟得用此下土」への注、『補注』の「故能使下土爲我用」に対し、『集注』は「故能有此下土而用之」としているような例を指す。